自分だけの部屋

ヴァージニア・ウルフ著 川本静子訳
みすず書房 1999 (ヴァージニア・ウルフコレクション)

商学部准教授 **高桑 晴子**

女性の自立に必要なものは「年に五百ポンドの収入と自分だけの部屋」――こう聞いてあなたはどう感じるでしょうか？これは､ヴァージニア・ウルフというイギリスの女性作家が1928年に、当時の女子大生に向かって語ったことです。そう聞いて、なるほど古臭い話だ、と感じるでしょうか？それとも現在の自分の問題として迫ってくるでしょうか？

80年以上前にイギリスでウルフという作家が語った女性の自立についての古典的エッセイを、現代の日本で読んで何の意味があるのだろう――そう感じる人もいるかもしれません。それでも男女の格差の問題は古くて新しい問題です。大学を卒業した女性の多くが就職するようになった現在でも、女性は結婚・出産・介護といった人生の様々な局面で、男性が一般には悩まないような形で、仕事を続けるのか、続けるのであればどう公私を両立させるのか、といった問題と直面します。

そのような現在にも通じる悩みを、ウルフは自分の作家という職業と重ね合わせ、自分の前に存在した女性作家たち、あるいは自分より前に作家として存在していたかもしれない女性たちに思いを馳せて語ります。作家らしく、想像の翼を広げて、流れるように思考を展開させ、これから社会に出ようとしている若き女性たちにエールを送っているのがこの『自分だけの部屋』です。

ウルフの一見とりとめなく見える空想的な論理展開は追いやすいものではないかもしれません。また歴史的・文化的な違いに戸惑うかもしれません。でも少し我慢をしてその思考の流れにたゆたってみてください。きっと彼女が「五百ポンドの収入と自分だけの部屋」という言葉で語った女性の問題がみえてくるはずです。

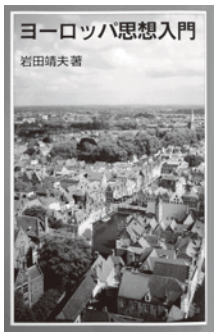
最後に、ウルフはこの名エッセイの中で、作家らしく、たくさんの文学作品に触れています。いままで外国文学に触れる機会のなかった人も、もし興味を持ったら、そのうちの一冊でも手に取って読んでみてください。きっと新しい世界が広がることでしょう。

ヨーロッパ思想入門

岩田靖夫著 岩波書店 2003 (岩波ジュニア新書)

文学部教授 **板坂 則子**

本書は三部構造で、第１部では「ギリシャの思想」として紀元前のギリシャ文明で生み出された「人間の自由と平等」の自覚や「理性主義」を、そして第２部では「ヘブライの信仰」としてキリスト教の「神」とは何かをその絶対的な「愛」と「許し」から、第３部「ヨーロッパ哲学の歩み」ではデカルトやカント、キルケゴールやニーチェなど中世以降の著名な哲学者たちの思索が述べられている。すなわちヨーロッパ哲学の入門書であるが、これがなかなか哲学史に留まるものではなく、人間が長い歴史の中で培ってきた智慧とは何なのかを深く考え込ませ、人間に生まれてきたことの喜びをじんわりと感じさせてくれる。個人的にはギリシャ部が特に好みである。私は日本の江戸期文学の研究者であるので、なぜヨーロッパ哲学？と思われるかもしれない。しかしたとえばすぐれたギリシャ悲劇が用いた「悲劇的アイロニー」という手法、これは岩田氏の言葉を借りれば表向きの意味と裏の意味を持つ「二重構造の科白」であり、作中人物の知らぬ真実を読者があらかじめ予知する



ことで深い悲劇性をもたらすものであるが、我が国平安朝の紫式部は『源氏物語』で用い、江戸期には上田秋成が『雨月物語』で多用している。ことほどさように、勝れた理知は時代も地理的な隔たりも易々と越えてしまう。

「ジュニア新書」ということに抵抗を感じる方もいるかもしれない。確かにこの書は「ジュニア」を対象に明快な文章で綴ろうという工夫に満ちているが、同時に読者に知らせたい思想を論理的に曲げることなく伝えようという強い意志によって貫かれている。高度に煉られた入門編である本書は、たとえば歌舞伎鑑賞教室がその本来の観客対象とする中高生よりも、それらの知識を少し身に付けた大学生により大きな感動を与えるように、「考える」ことそのものを客観的に見出した大学新入生にこそ相応しい名著なのである。

数年に一度くらい、人類の未来が悲観的に思われる時、私はこの書を手に取る。こんなに輝く人類の叡智が、私たちの後ろには延々と連なり私たちを支えている。これほどの希望を与えてくれる書は、そんなに多くあるものではない。